

臼井 正樹 新連載

今年の前半に、かねてからの課題であった脳性マヒ者、横田弘に関する本を生活書院から出したことでしばらく気が抜けていた。



そうこうするうちに2016年7月26日が来て、相模原障害者施設殺傷事件が起きてしまった。『障害者殺しの思想』『否定される命からの問い』を著した横田だったらこのことをどう考えるだろうか。そんなことを考えながら2か月が過ぎ、いつものような時間に追われる大学教員の生活の戻ってしまった。

そうした中ではあるが本マガジンの編集長である団先生からお誘いを受け、今回を初めとして『介護福祉を巡る断章』と

して短い文章を連載させていただくことにした。おそらく介護を巡っての私事を中心にしながら、ときどき考えたことを織り交ぜてのまさしく雑文になると思われるが、よろしければお付き合いいただきたい。

山下桂永子 新連載

はじめまして。山下桂永子(やましたけえこ)と申します。仕事としては(心理士以外のことも)いろいろやってきましたが、今続いているのは、某市の教育委員会で教育相談を13年ほど、フリースクールのスタッフを10年ほど、スクールカウンセラーを9年ほど、看護学校のピンポイント講師を3年ほどやっています。

そして仕事ではない個人的な活動として、町家合宿ということをして10年ほどやっておりまして、今回、そのことについて、団先生からお誘いを受けて、論文ではないということで、少し気が楽になり、書いてみることにしました。なにぶん今まで言語化ししろし言われても、なかなか手をつけられなかったものですから、ずいぶん拙い文章になってしまいそうですが、読んで頂ければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

小池英梨子 連載再開

9月末で前職を退職し、「のらねこ生活」がスタートしました。それに伴い連載も再開しました。猫が繋ぐ縁はとても不思議で、来月はいったいどこで何をしているのか、自分でもわかりません。次回の連載で、自分がどんなことを書いているのか、自分でも楽しみです。

先日友人と近年増えている「保護猫カフェ」めぐりをしました。猫の保護活動やTNR活動をしているボランティアさんがなんと猫たちが新しい飼い主さんと巡り合うチャンスを増やしたいという強い思いからごちなくも運営している所、活動しているボランティアさんを助けようとオシャレに若い人が運営している所など、素敵な動きだなと思うお店がいくつもある中、入った瞬間に糞尿の臭いが鼻につき、猫はケージに入れられたまま、犬は自由ではあるがスペースに対して頭数が多すぎる店があった。しかも、ほとんどの犬猫が血統名つきの純血種だった。さらに不妊去

勢手術をしていない(基本的に保護猫カフェは、これ以上捨て猫やノラ猫が増えないようにしたいという思いがあるため、避妊去勢手術は絶対している。というか、していなければ、交配してしまうため、室内を自由に歩かせることができない)。譲渡条件を聞くと、無料だが運営しているNPO団体に数万円の強制寄付と、初回餌セット2万円相当の強制購入が必要だった。ここにいる犬や猫の経緯を聞くと、ペットショップの売れ残りや、ブリーダーが手放した犬猫だという。つまり、乱暴な言い方をすればペットショップとブリーダーのアウトレットだ。保護猫、保護犬ブームに乗っていた。しかし悲しいことに、店内は賑わっていた。同じようなうたい文句でも、内容は大きく違うことがある。実際に自分の目で見て、その裏で動いているシステムを見極める必要性を感じた一日だった。

三野宏治 連載再開

二年ぶりの連載です。相変わらず「面白くない」歴史の話を書いています。今の話や現場の話を買いたいと思いますし書くこともあるのですが、まず「面白くない」歴史の話が終わるまで書こうと思います。歴史の話は、特に対人援助の歴史の話は大切だと思っています。福祉学というものがあるとすれば、そのほとんどが現場での実践を集めてまとめたものだと私は考えているので、最近の話かか遠い昔のことか程度の差はあれ過去のことであろうと思います。その歴史をたどると「かつて良いとされていたこと」は現代では否定されていることが多くみられます。入所施設は建設当時、「良いもの」で「必要とされていた」ものです。しかし後に否定されます。では、いま「良いとされている」支援や方法が後年否定されないといえるのか。そんなことを思いながら歴史のことをかいています。

「面白くない」のは歴史そのものにその責があるのではないことは自明です。それは大河ドラマを見る人は多いし、歴史ドキュメンタリーは旅番組や芸人が騒いでいるだけの番組と同じくらい多いことからわかります。私はどれもみませんが人気があるようです。ではなぜ私が書く歴史の話が「面白くない」のでしょうか。分析し

た結果、「面白くない」理由として考えられるのは、映像や音楽が入っていないことが原因だと考えられます。次にNHKが制作していないかことも可能性として高いでしょう。これは、考えたくないですが「私の書き方が良くない」可能性も少しあるかもしれません。本当に考えたくありませんが。

松村奈奈子

今回は電子カルテがテーマ。私は欧米の医療ドラマやサスペンスを見るのが好きで、電子カルテが導入されているのはドラマや映画でもよく目にしていました。

ただ、ドラマの中の精神科医は相変わらずゆったりと患者さんと向き合っていて、紙に記録を書いています。むむっ、パソコンはどこ？電子カルテじゃないのか？と謎でした。

数年前にイギリスに留学した精神科医に聞くと“医師は記録を紙に書いて、その後、秘書が電子カルテに入力してたよ、うらやましい”と笑って話します。秘書を雇えるのか…

アメリカに留学した精神科医も“1日に8人ほどしか診察しないしね”“当然、ウェイトングリスト(診察の順番待ちリスト)に名前がのっても、なかなか診察日はこないみたいだよ”と。

だいたい、診療報酬(診察代金)が日本は低く抑えてあるので、保険制度の診療では、1日8人の診察で秘書を雇って精神科医が生活費を稼ぐことはなかなか難しいです。

で、この日本の医療システムの中で、どう診療に関わっていくべきか…いまだ模索中です

ガヴィニオ重利子

12月、この街ではクリスマスの前にもう一つ、大きなイベントがある。エスカラードと呼ばれる州の独立祭。1602年12月11日の夜、フランス(当時のサヴォア公)から仕掛けられた奇襲に市民が立ち向かい、見事独立を勝ち取ったことを祝い、州をあげてパレードや仮装、マラソン大会などが開催される。地元の小学校では、その日仮装をして登校することが許されており、毎年賑やかな登校風景が広がる。もちろん先生たちも負けてはおらず、学校はちよ

っとしたコント劇場のような様相を帯びる。

毎年、わが家の子どもたちも「今年は何を着よう？」とワクワクし始める今週。ショッピングセンターには 仮装用コスチューム売り場もできていて、ゴジラやクマの着ぐるみから中世兵士などイベントの文脈に沿ったものまで、様々な衣装が揃う。多くの子どもたちがその年の流行(スター・ウォーズやアナと雪の女王など)の衣装に身を包むが、中には空手や柔道などを習う子どもたちが道着を「仮装」として着てくることがある。日本人の私は、そのことにどこか複雑な思いにさせられる。

彼らにとっては確かにエキゾチックな仮装なのだろうなと理解しつつ、私にとってそれはやはり伝統や文化を意味するものようだった。そんなことを思う母を尻目に、我が子とはいうと…日本から持ってきた浴衣を羽織って、同じく日本で入手した 丁髷カツラをかぶり、100円ショップの刀を差した「サムライ」という変装を創作。私としては一番どうかと思う姿で、昨年は登校していった。さて、今年はどうなることやら。ハラハラ、ドキドキ。

奥野景子

ここ最近、いろいろと悶々とするものがあつた。悶々だけでは収まりきらず、悶々々々々々々々々々…といった感じになっている。ただ、そんなこともありながら、上手く言えないなりに自分の中で明らかになってきたこともある。だからこそ、悶々ループから抜け出せないようにも思うが、あまり嫌いでもないのだからぼちぼちやりたいと思う。

私があることを知らなかったからと言う理由で、それが自分の身に降りかかった時、それにあたふたしたり、傷ついたりしたくない。そして、同じ理由で、誰かを傷つけるようなこともしたくない、と最近思う。以前にもどこかで書いたような気がするが、その全てを知ることは出来ないと思っている。だからこそ、自分の手の届く範囲で気になることや知りたい、考えておきたいと思うことは、大切にしたいと思っている。そして、あたふたしたり、傷ついたり、傷つけてしまった時は、ちゃんと立ち止ま

れる人でありたいな、とも思う。

柳 たかを

再会

30年近く昔のこと、若い芝居好きの友人から「オズの魔法使い」を紙芝居に描いてほしい」と頼まれ舞台用の台本をわたされた。

祖父母とカンザスの田舎で暮らす少女ドロシーが、竜巻で家ごと飛ばされながらも、強い決意でふたたび祖父母のいる故郷をめざすファンタジー。物語に引き込まれ、1年以上かかり紙芝居では異例の70枚を越える大作となって完成させた。あれから四半世紀以上の月日が経つ。

先日、京都マンガミュージアムで戦後子供マンガの原点と言われる「新宝島」を手塚治虫と共同執筆した漫画家・酒井七馬と七馬の師である小寺鳩甫(きゅうほ)を紹介した「小寺鳩甫と酒井七馬展」が開催された。

期間中に、生前の酒井先生の思い出を語るイベントに出演させていただいたが、余興でプロの紙芝居師が酒井七馬作の紙芝居を実演するコーナーがあり、子供時代に戻って楽しませていただいた。するとなんとそこに私が描いた『オズの魔法使い』(My way)が登場した。70枚以上と一回で演じるには長過ぎるので最初の10枚ほどを実演され、「続きはまた別の日に別会場で行います」とのこと。



じつは、(オズの魔法使い)のことはすっかり忘れていた。実物と再会しても驚いたが、見たところ色も褪せてないようで大事にいただけてるらしい、それがとてもうれしかった。その再演がもうすぐあるらしいと聞いている、どんな風に演じてもらえるのかワクワクしている。

齋藤 清二

後期が始まって、それなりに色々な事に追われながら日々が過ぎていく。昨年は京都の紅葉はあまり色づきが良くなかったようだったが、今年は当たり年ということである。ちょうど11月の半ばから忙しくなり、いわゆる有名どころに出かけることはできなかったが、ちょっとした風景や何気ない自然を写真に撮る習慣が定着してきて、それなりにおもしろい。美的対象の探求などと大げさなことを言うつもりは毛頭ないが、手当たり次第に写真に撮ってみて、FBなどにアップしてみて初めて「ああこれってこんなに美しかったのか」と気が付くことが多くなった。再現＝表象(re-present)することによって、すでにそこにあっても見えていなかったことが見えるようになるということは確かにあるのだと感じている。



石田 佳子

2016年11月8日に行われたアメリカの大統領選挙では、「プアーホワイト(Poor White)」「ホワイトラッシュ(White Trash)」「ヒルビリー(Hillbilly)」などと俗に呼ばれる貧しい白人層が、一躍脚光を浴びました。また、「グローバリゼーションに取り残され困窮した彼らの怒りが、ポリテリコリコリネス(政治的公平性)を否定するランプの勝利を後押しした」とか「彼らの住む田舎町には同じ種類の白人しか住んでおらず、その約半数は自分の州の外へ出たことがないため、彼らは他の(異なる肌色や思想や宗教を持つ)人々と直に接した経験がない」などとも言われていました(町山智弘、TBSラジオ『たまむすび』より)。いずれにしても、これまでほとんど顧みられなかった人々が、いつの間にか米

民の過半数を超えて居たこと、国政を動かしたことに、世界中が驚いたのです。

私の知る限りでは、これまでアメリカの映画やTVドラマなどでも、彼らの生活や心情を扱った作品は、少なかつたと思いません。(例外には、女性の連続殺人犯を描いた『モンスター』や、過食症の母と自閉症の弟を抱えて家族の重圧に苦しむ『ギルバート・グレイブ』などがありますが…反対に、これでもかと言うほど登場していたのは、『ビバリーヒルズ高校/青春白書』『デスパレートな妻たち』『セックス・アンド・ザ・シティ』などに見られる“セレブ”たちです。お洒落な家に住んで、優雅に装い、華やかな話題を繰り広げる人たちを觀せられた方が、エンターテインメントとしては良いのかもしれませんが…実際には、「こんな人たち、どこに居るの?」「どれだけ居るの?」という気もします。「しょせん作り話だから」と言えばその通りですが、これでは世界中の人たちに“アメリカの白人=セレブ”という間違ったイメージを植えつけかねません。

ただでさえ、日本のマスコミは、人が死ぬ場面や残酷過ぎる事件など「不適切な内容」を報道しません。それは(子どもを含む)「視聴者への配慮」なのでしょうが、そのようにして取捨選択され加工された情報や映像を取り込むのに慣れることは、お気楽な反面、後でその大きな代償(ツケ)がまわって来そうな不安も感じさせます。「平和で安全な国」と言われる日本に居て、その外で起きている事柄に無関心となり、自己完結的な「内向きの暮らし」を続けることは、私たちに将来、何をもたらすのでしょうか?

現実には、目を背けたくなるほど悲惨な事柄や危険な人物、状況は、存在しています。にもかかわらず、「現実にある危険」や「人間の暗い面」に対する認識が希薄になってしまうことは、大きな問題だと私は思います。少なくとも海外へ出たら、「知らなかった」では済まされない危険に遭遇する可能性が高くなると考えるべきでしょう。個人の身に降りかかる災難だけでも、詐欺や窃盗や誘拐や強盗の被害にあうとか、麻薬の運び屋にされるとか、危険は常に、すぐそこに、「ある」のです。それに

ついて知っていても、いざとなれば防ぎきれない場合もあるほどなのに、知らなければ、自ら危険を招き入れるようなものです。

また、自分で調べたり確かめることをせず、与えられた情報を鵜呑みにしていると、「いつの間にか、とんでもない所へ連れて来られてしまった!」という目に陥る可能性があります。マスコミによる世論の誘導やイメージの改竄、事実の捏造など…誰かに惑わされて自らの進む方向を見誤らないためには、情報を得るだけではなく、その真偽を見極めて取捨選択する“眼力(フィルター)”を磨くことが大切でしょう。その力を養うためには、(たくさんの失敗をしながら!)実際にやってみる…経験値を上げることが、役に立つのではないのでしょうか。

結局、自分で経験できることなど限られているけれど、本当のことは自分で経験してみないとわからないんだな…でもだから面白いんだな!と思っている昨今であります。

しずてむ♪きよたけ

東京の仕事で関わりある芦部さん。彼女は中間支援組織にいる人。僕は、彼女に感謝している。

僕は、プロジェクトの事務局長に所属しているけど、「清武システムズ」と看板をさげているので、その人だけではない。

それだけに止まれない人であるし、分りにくい存在であり、所属現場に片足しか突っ込んでいないから、周囲に勘違いされるような振る舞いをしているはずだ。なんらかの境界にいと痛感し、悲し涙や悔しさを伴うことも多い。

それにもかかわらず、芦部さんは、熱心により良いチームになるように協力してくれている。また、そうしたチームになって来ている事をキャッチしてくれる。

例えば、こんなことから僕は感じ取っている。僕が、くじけ、いじけている時、僕の見えている何かを活かしてくれるよう励まし、自分だったら何ができるか、と考え、伝え、動いてくれていること。

他にもそうした振る舞いをしてくれる人たちに恵まれているのに、なぜ芦部さんをピックアップしているのか。

それは、彼女が、今年度をもって、所属している職場から辞職する。このことを、分かりにくい僕なのに、なぜか最初に伝えてくれた。

このタイミングを通して、僕は付き合いが1年くらいとまだ浅いが、彼女の存在を残さずにはいられなかった。

芦部さん！正直、辞めて欲しくない！しかし、辞める事で始まる事もある。辞めると決めたから彼女の中で、動き出した事がきつとあると思う。だって、知ってから僕は、芦部さんがいなかったらと考え、プロジェクト、チーム、協働のためにどのようにしたらいいか考え、動き出していたのだから。

彼女がいたこれまでを振り返ると、誰かと、共に歩むことで気づくことがあると知る。また、少し距離があるから気づく、相手の存在。存在自体に意味があることと改めて気づいたのだった。

実務とは違う振る舞いから、その人の人柄を感じることもあったのだと思う。

芦部さん、早いけど、お疲れ様！僕は、あなたから得た高揚するような感覚が、沢山ありました。これからも、まだ頼ります。これからも共に、成長していかないかい？芦部さんの次のシーズンに期待を込めて。

便乗して、我が連載について。今回で、シーズン1「SMクラブの受付」を終了します！シーズン2のテーマは、動きながら考えま〜す。

小林茂

前回の短信で温泉案内をしようと予告していました。今回は、その第一回目です。もともと、温泉やスーパー銭湯は好きな方でしたが、北海道に来て何が良いかという温泉の多さが挙げられます。毎週1カ所巡ったとしても何年かかるかわからないくらい温泉があります。現実には、そのすべてを巡り紹介することはできないのですが、少しずつ行った先のレポートをしようと思います。

9月22日に、元の職場の同僚と当事者仲間の吉さんと佐々木実さん(浦河べてるの家理事長)の慰労会をしてきました。十勝地方の浦幌町にある留真温泉(るしんおんせん)に行ってきました。留真温泉

は、留真川沿いの山中にある温泉で、1901年に発見された歴史ある温泉です。2011年にリニューアルオープンされたこともあり、建物も湯船もきれいなところですよ。湯船は、露天風呂、ふつう程度の熱さの湯舟、ややぬるめの湯舟、サウナがあります。どの湯船も小ぶりで3~4人入ると満員になるような大きさです。気になる泉質は、単純硫黄温泉(アルカリ性低拡張性温泉低温泉)PH10.0の透明なお湯です。PH値が高いのでヌルヌルした感じがあります。古い角質を落とす美肌の湯ということです。一般にPHが高い泉質はお湯が肌に膜を作るようで良く温まります。また、ここの温泉のお湯は飲むことも可能で、飲用の蛇口もあり飲むことができます。団体のお客が来るようなところではないので、山間の景色を眺めながらのんびり浸かるにはいい温泉です。



水野スウ

2016.11.23

明日から少し長めの憲法のおはなし出前旅がはじまるので、今日中に短信書がなくっちゃ、と今、書いてます(スマホは持っていないので)。

今回は、豊川→豊橋→姫路→高松→松山、というノンストップの旅。姫路と松山の会は、この夏に福山で話を聞いてくださった方が、次は自分の町で、と、どちらも個人で、はじめはたったの一人で、企画、準備をはじめてくれました。

姫路のTさんは、私のことをお知りあいや友人たちに知ってもらうため、毎日1ページずつ、私の「けんぼうBOOK」をラインやメールで友人たちに送り続け、ついに一冊まるごと読んでもらったとか。まるで毎朝の新聞配達みたい！

松山の会を主催する若いMさんは、市内のカフェを何軒も回っては、前売り券をおかせてもらい、そのお店の紹介とあわせて当日のけんぼうかふえの宣伝を、次々FBにアップしていきました。更新されるイベントページも、おしゃれでとっても楽しい。アナログな私には真似のできないことです。

当日何人みえるかは、ふたを開けてみなきゃわからない。でもこういうのって人数じゃないと思う。何より、組織の一員ではなくて、個として考える、動きだす、今そんな人たちのふえていること、その手応えがうれしい。その日に到るまでの過程——憲法を話題にする、チラシをつくる、声かけする、誘ってみる、手伝いを頼む、といった小さなふだんの努力、一つひとつの積みかさねが、未来に確かに繋がっていくと思うからです。

度重なる出前のおかげでだいぶ旅慣れた私。思いの外、軽い荷物で明日の朝早くでかけます。

高垣愉佳 新規連載開始

精神科訪問看護日記「おじゃまします」をスタートしました。よろしくお付き合いください。この話は前職場での経験をまとめたシリーズです。前職場の許可もとっておりますので、安心してお読みください。現在は訪問看護は緊急時のみ対応していて、基本は精神科・心療内科のクリニックで初診インターカーとナースをしています。初診のインタークには、心理の知識や経験と医療の知識や経験のどちらもが活用出来て、天職かもしれないと思ってしまうくらいです。また、その後の治療へのモチベーションや信頼関係づくりという点でもインタークは重要ななあ〜と思い、毎日楽しく働いています。

浦田雅夫

9月になんと「肺炎」に。老眼もますます進行中。エイジングまっしぐらですが、何とか歯止めをと思っていた矢先「歯」も抜け。健康第一で、アンチエイジングに向かいたいです。

中島弘美

対人援助学会研究会の準備等をお手伝いさせていただいている中島です。

先日、大阪で「家族支援のプログラム」をテーマに、お話をさせていただく機会をいただき、家族支援のポイントとりこんママパパ応援講座の紹介及びグループワークをしました。

こちらの福祉カウンセリング講座は、1年で20回の講座数があり、3年間がひとまとまりのサイクルとなる、充実した内容です。

この民間主催の講座は49年もの実績があります。来年は50年、半世紀の節目の年です。そこで、協会の方にお越しいただいて、そのあゆみについて、研究会でお話をしてもらえないかと現在、交渉中です。いまのところ、前向きなお返事をいただいております。年度内に開催することを目標にしています。どうぞお楽しみに！

藤信子

ここ2、3日で、窓の外を黄色く照らしていた銀杏がすっかり散ってしまった。今年は、京都も38度になる日があるような猛暑だったので、紅葉の前に葉が枯れてきれいな色にならないのではないかと心配していたけれど、銀杏、紅葉はきれいに色づいている。



ただ例年より櫛があまりきれいではないようだ。これは我が家のある団地の並木もだけれど、御池通の並木も今年は早く枯れた色になっているようで、あまり美しくない。木の種類によって、暑さ寒さの影響が違うのだろうか。そう考えながら、ガラス戸の向こうを眺めたら、目の前の公園の銀杏はすっかり散っているのに、少し東のお寺の銀杏はまだとてもきれいに輝いている。身近な花や木のことを考える時間を大切にしたい。

中村周平

引越は時間が掛かります。引越は費用が掛かります。引越は気持ちを一更新することができます。引越は新しい出

会いがあります。

2年という約束で住み始めた現在の住居。本当に本当にあつという間でした。「びっくり！」という言葉では言い表せない……時間の速さに焦りと喪失感が入り乱れている、というような感じです。

ということで、2年近くお世話になった現住居から引越します。時間とお金は掛かりますが、この引越しが自分にとって様々な意味で変化をもたらしてくれると期待しながら……さてさて、荷造りを。

浅田英輔

全国の都道府県職員が50人くらい集まって半年間研修をするというものに参加しており、10月から半年間東京におります。1日5時限の勉強をして、夜は寮の仲間たちといろんな地域の美味しいものを食べています。高知のカツオ、仙台の牛タン、長崎の皿うどん、福岡のもつ鍋、そして様々な日本酒と、贅沢な生活です。何よりも雪のない冬、太陽がある冬というのはいいものですね。都心からは少し離れていて、晴れた日には富士山も見えます。つらいことは、一日中黙って座っていることですね。中高生は毎日これをやっているのかと思うとすごいと思います。3月までおりますので、お時間取れるかたはぜひお声がけください！

中村正

この秋の学会は関西に集中していた。毎週末のように学会や研究集会があった。関西なので企画を頼まれることが多く、例年になく学会に参画・参加した。狭い学者の世界で、重箱の隅をつつくような議論は面白くないので、なるべく異分野の出会いとなるような企画を練った。11月末に大阪で開催された「日本子ども虐待防止学会」は3000人近い参加があったという。私は会員ではないので部外者の感想となるが、関心の持たれ方や議論の傾向も含めて虐待問題のきり取り方をもっと「平易なものに洗練させていく」必要を感じた。たとえば虐待への「介入」に力点が置かれすぎていること、子どもと養育者の支援、社会全体が子どもを育て、親を後景に退かせる取り組み、つまり養護だけではない社会的養育論等が語られるべきだと思った。

「平易に洗練させる」とは、日常的な子育ての苦労や不安から出発すべきという意味であり、その意味では当事者の参加・参画があってもよく、あまりにも専門職者の目線が強いような印象を受けた。



それでも、記念講演に招いたゴリラ研究の霊長類学者山極壽一さんを対話のためにひきとめ、理化学研究所の脳科学者である黒田公美さんをひっぱりだし、私を加えた三人でシンポジウムを組織したところ300人近い参加者があり、子育てについての異分野討論ができた。人間の赤ちゃんは何故泣くのかという山極さんの問題提起、動物の世界のオスと人間の父親・男性の役割の違い、向社会的行動の典型としての育児と脳の働き、動物と人間にとっての家族の意味の異同等、異分野交流ができた。二日目の企画では、母親支援に取り組む伊藤悠子さんと藤木美奈子さん、男親塾にとりくむ私が、大阪市児童相談所の久保さんや高下さんの発案による柔軟な公私連携をとって取り組みはじめた「養育者支援10年」の経過と成果について発表する分科会をもった。こちらも会場いっぱい参加者だった。今年の学会はこれで終わりと思っていたら、広島文化学園大学の副学長さんからメールがあり、全学あげての研究が「対人援助研究の推進」に決まり、そのための「対人援助研究センター」が文部科学省私立大学ブランディング事業に採択されたのでアイデアを欲しいという依頼があり、年末に出向くことにした。対人援助学会でお世話になっている神奈川県立保健福祉大学の臼井正樹さんのところは以前から「ヒューマンサービスの実現」を掲げており、ヒューマンサービス研究会を組織されている(臼井さんは本号から連載の予定)。全国に同様の研究や教育の組織が広がると思うが、共通点は実践と理論の関連を重視していることである。対人援助学会と

深い関わりのある立命館大学大学院応用人間科学研究科は、並行してスタートさせた人間科学研究所とともに「対人援助学の創造」を掲げている。立命館大学では、2016年度から総合心理学部を開設し、2017年度には専門職大学院・教職研究科を始動させる。2018年度には、応用人間科学研究科を改組転換し、いままで修士課程だけだったが博士後期課程も加えて「人間科学研究科」とする計画で文部科学省と相談をしている。児童福祉司の専門性を高める研修制度が始まること、公認心理師制度が発足することもあり、そうであるならばより大胆な対人援助学の創造に向かうことを意図し、単なる資格課程となることのないようにしていきたいと思っている。学生や院生には人気があると想定される公認心理師資格であるが、名称独占なので、どんな仕事ができる人や資格なのか問われることになる。単に資格課程に対応するというのは消極的な契機でしかなく、志は低い。多様な仕事を対人援助学という観点から再構築していくという新たな展開に向かう契機にしていきたいと思う。そのための異分野交流から刺激を受けた秋の学会であった。

牛若孝治

1億2700万分の1の確立の出会いを大事にできないのか！！

「あなたはいつから眼が見えなくなったのですか？」、外出する度に、そして仕事で患者さんと接する度に、こんなことを聞かれる。あるいは、「私も障害者なんです」、「私の家族のだれそれも眼が見えなくて」などという話題。私はこのような話題が大嫌いである。だから私は、この手の話題になるとこう言いたくなる。場合によっては現実と言ってしまふこともある。

「あなたは、障害のある人たちと出会うと、障害者の話しかできないんですか、あなたの心音は実に貧弱ですね。この世界人口を、仮に70億人とした場合、私たちが出会う確立は70億分の1、日本の人口を仮に1億2700万人とした場合でも、私たちが出会う確立は1億2700万分の1。そ

の1億2700万分の1の確立で出合った人に、挨拶一つで傷に、それでもあなたは社会人ですか。よくよく考えてみてください。これからの日本はますます厳しい時代に突入します。そんなときに、いちいち「あなたはいつから障害を負ったのですか？」などと愚かな質問をするのですか。そんな質問をするような時間があつたら、もっと日本の政治や社会の仕組み・世界情勢に目を向けて、積極的に自分から発信するぐらいの社会性を持ってください。そして、いろいろな人と出合ったら、「70億分の1の確率で、もしくは1億2700万分の1の確立でお会いできてよかった」と、自分たちの方から言ってみてください。

袴田洋子

締め切りをまたもや数日過ぎてしまって、すみません。今日は、11月27日。今の自分にしか書けないことを書いてみようと思いました。人生、一度きり。あるがままに。私らしく。自分の気持ちを表現するのが、本当に上手くなかった、と気づきました。もっと自由に生きてみようと思います。

団遊

最近、パソコンバッテリーの様子がおかしい。減りが早くなったのは消耗したからなのだろうが、残り10%になった際に、「あとどのくらい持つか」の時間推定がハチャメチャなのだ。先日は「バッテリーが残り10%になっています。あと約7時間しか持ちません」と表示された。7時間持てば十分なのだが。アダプターを持ち歩いていない場合は、残り時間の中で優先事項を決めて仕事を処理するのがぼくのいつものパターンだから、こうなるとリズムが狂う。しばらくバッテリーとの駆け引きが続きそうだ。

大石仁美

私は、自分でワンを飼うまで、愛犬家と言われる人たちをずい分誤解していました。「犬に服を着せるなんて！犬はきっと迷惑しているでしょう。季節によって毛替わりしているというのに。自然のままの方がずっといいはず。えっ、防寒着以外にレインコートや靴まであるですって。人間の子じゃあるまいし、玩具にされて可哀そう

なワンちゃんたち。」

ところが、実際ワンを飼ってみると、寒いところが原産地のわが愛犬は、夏は苦しそうで息絶え絶え。クーラなしでは夏は越せませんでした。日が暮れてから散歩に連れて行っても、帰るとすぐプールに飛び込み、全身を水につけて体温を下げています。冬はどんなに寒くても平気。反対に寒さに弱くコートを着せないと体調を崩す犬もあるようで、要は血統書つきの何の犬種かによってずいぶんちがうのです。鎖に繋がれて、完全に人間の管理下にあるワンちゃんたちの宿命として、過去にどこかの家にもいた、雑種という犬種は淘汰されてしまっていたのです。



人間による環境の変化は、ワンの生活も大きく変えてしまいました。夏、コンクリートで固められた路面は強い日差しで鉄板のように焼け、日中はとても歩けません。ワンの肉球は焼け焦げてしまいます。日が暮れてからも、手を置いてみると、まだまだ熱く、8時を過ぎてやっとなんとか歩けるかなあという具合。靴を履かせたくなるのもうなずけます。体験して初めて解ることがいっぱい。

自分はなんて思い込みの強い人間だったのか思い知りましたが、もしかして人間は皆、思い込みの中で生きているのかも知れないと思ったことでした。」

村本邦子

楽しかった研究休暇も終わった。あくせくせず、長く楽しく働き続けられるようにと、今、いろいろと努力している。これまで「今日できることは今日やる」をモットーに生きてきたけれど、「明日でいいことは明日する」に方針変更した。それから週1本は映画を観に行くこと。ちょっと仕事が多すぎた感はあるが、でも今のところ、まあまあ

のペースかな。いい加減、大人の余裕を身につけたいものだ。

國友万裕

ちょっとずつだけど、男性被害へ社会の関心は向いてきています。『ヒメアノール』は久しぶりに興奮させられた日本映画でした。いじめられっ子や非モテ系の三人の男性を中心に、極めて新鮮な視点で、その末路を描いていきます。こういう映画がではじめたのは、男性学にとっての大きな進歩です。話は結構グロいのですが、いじめられたり、非モテだったりの男性は、大人になってもそのトラウマを引きずり続けることがわかつて思います。ぜひ、女性に見てもらいたい。そして、男は痛い！ということを知ってもらいたいです。



久米泰介さんの翻訳による『広がるミサンドリー』（彩流社）の書評が朝日新聞に出了。斎藤美奈子さんによる好意的な書評でした。ミサンドリーとは男性嫌悪のことを指します。これまで女性差別の文献は山のように出てきましたが、男性差別についての本はほとんどなかったの、これが朝日の書評に大きく出るとは画期的なことです。

女性専用車両、映画のレディースデーなど女性に特化したサービスはたくさんあるのに、男に特化したサービスはほとんどない、まだまだ政治家や管理職は男ばかりだけど、しかし、権力握れる男なんて、ごく一握り。最初から権力なんて要らないという男だっているし、男イコール支配階級っていう考えはもう古い、なぜ、これくらいのことを皆わかってくれないの????? いつまで男は割の合わない思いをしなくてはならないのか。僕は小学生の頃からそれを訴えているんです。わかってもらえないままもう 50 代、はよ、

誰かわかってください！！！！（笑）

北村真也

認定フリースクール「アウラの森 知誠館」代表。(<http://tiseikan.com>)

古川秀明

今年は新しいCDも完成し、関西だけではなく、九州や東北でも講演会&ライブをさせていただき、忙しいけれど充実した 1 年でした。対人援助マガジンを書くことで、その時の反省や今後の課題が整理されていくので、自分にとってとても良い総括になります。

(シンガーソングライター)

西川友理

京都西山短期大学で保育士養成をしています。あといろいろ、面白そうなことに顔を突っ込んでいます。

この締め切りから次の締め切りまでの間に、40 歳の誕生日を迎える予定です。ついに第二成人式。とにかく私の周りの諸先輩方は毎日楽しくて仕方がない！という顔をしている人が多くて、おかげさまで年をとることに期待とワクワクしかありません。

もちろん皆さまそれぞれに人に言えない痛みや結構重い荷物もおありでしょうが、それさえも自らの深みや厚みや味として大切に抱きしめて、明るく元気で機嫌よい方が大変多いです。人生の壁には、そうやって挑むのか、と勉強させて頂いております。

京都精華大学のあかたちかこ先生が以前何だったかの講演会で「機嫌よくいる、というのは社会人としてのマナー」とおっしゃっていました。諸先輩方は皆さんマナーの良い方ばかりで、思わず身は引き締まり、背筋は伸びて、心はユルむ思いです。

「悲観主義は気分のものであり、楽観主義は意志のものである（アラン『幸福論』）」。私も日々、ご機嫌でいる自分を選びます。

坂口伊都

養育里親をしながら、いろいろな仕事をさせてもらっているのですが、その中の一つにスクール・ソーシャル・ワーカーが

あります。学校という場所は、あまり立地条件がいいわけではないので、自家用車で移動することが多く、その日も学校の指定された場所に駐車していました。業務が終わり、帰ろうとすると違和感があり、フロントガラスをよく見るとキズがついています。うん？と思って外に出てみると、ワイパーの所に石が落ちているではありませんか。慌てて、教頭先生に報告をし、写真を撮ってもらい、石を預けました。雇い主の教育委員会にも報告をしましたが、誰がしたかがわからないと何もできないと言います。SSW 担当の指導主事は、申し訳ないといろいろ動いてくれましたが、結局 12 万円の修理費がかかりました。夫からは、週 1 回の勤務で修理代を稼いでいるようなもんだなと言われ、全く反論できません。運が悪かったねという問題ではないでしょう。教育委員会には、来年度の労働条件や保証をしっかりと考え直してくださいとお願いしています。保険を見直してもらおうと、条件がマシになるはず。おかげで、教育委員会からは今年度いっぱい、送迎される身になり、帰り時間になると「忘れられていないかしら」と不安になりながら過ごしています。いや～、いろいろありますね。



河岸由里子

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

さて、最近あるクライアントさんの話から。

その人は、難病にかかりあちこちに麻痺が出て、1年の間に歩くこともできなくなった。たいていの人がそうであるように、今まで健康で過ごしてきたし、自分が病気で動けなくなるなどは考えたこともなかった。今動けなくなって、「たとえ末期のがんと宣告されたとしても、動ける方が良い。」

と言っていた。たくさん話をした最後に、「今元気でいる人は、本当に偶然が幾つもあるって、奇跡的に元気でいられるのだ。」と言った。

確かにその通りだ。ちょっと動きがずれるだけで、もしかしたら事故に遭っていたかもしれないし、ほんの僅かな違いで、病気にいかかったりケガをしたかもしれない。そもそも、五体満足で、健康体として生まれたことでさえ、幾つもの良い条件が重なったともいえる。このように考えると、今、この年齢まで大きな病気もケガもせず、結婚して子を産み育て、子どもたちも健康に育っていることなど、本当に奇跡的なものかもしれないと思えてくる。

後悔のない一日を過ごすことを第一に、毎日健康で過ごしていることに感謝し、これからも「日々是好日」と過ごしていきたいものだ、その人の話を聴いてあらためて思った。

今回は「先人の知恵から」と「境界あれこれ」の二本立てになった。別によくばるつもりはなかったのだが、中途半端が嫌いなのと、ラジオで諺の話を聴いていて、やはり「先人の知恵から」も続けようと思い、二つとも書くことになった。次回も二本書けるかどうかはわからないが、無理せず、ボチボチやっつけていこうと思う。

岡崎正明

我が家の1歳の娘の最近のブームは、相手に食べ物を与えること。

毎日自分が「ア〜」と口に運んでもらったり、上の子に親が食べさせる様子を見て真似するようになったのだろう。ミラーニューロンが働いているようでなによりだ。

食べかけのパンや豆腐を手で掴み、「アー」とかいいながら一生懸命私の口に入れてこようとする姿は可愛いが、あまり見た目のよろしくない食物を放り込んでくるので、正直勘弁してほしい。特に朝の忙しい時は、真面目に食べないことに怒りすら覚える。料簡の狭い親業勉強中のおっさんである。

トランプ大統領が誕生したショックと、イギリスがEUを離脱する流れを受け、世界は「協調」から「分断」だ！とマスコミは騒いでいる。たしかにどことなく不穏な空気

を感じるが、歴史の長い軸で考えると、こういうことは初めてではないのだろう。離合集散を繰り返して、私たちは少しずつ賢くなっていると思いたい。

トランプが「言えなかった本心をいってくれる！」と、彼の発言がさも人間の本性のように語る意見があるが、そんな単純なものでもないと思っている。本音も建前も、欲求も理想も、私たちの内から出ているものだ。すべてひっくるめて、まぎれもない私たちだ。そのへんの詳しいことは、また本文で。

まだたいした躰も、道徳の授業も受けていない娘が、他者に分け与え施す姿を見て、希望は捨てないでいいのだと確信している。 buimen0412@yahoo.co.jp

竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職。

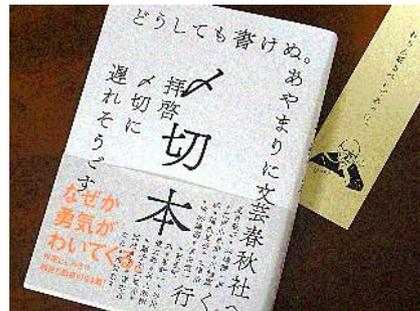
トランプ氏がアメリカの次期大統領に選ばれた。予想外の結果だそうだ。しかし、その結果に関してはイギリスのEU離脱の国民投票も同様だろう。アメリカもヨーロッパも日本も同じような状況だと思う。普通の人々が困っている。実感として普通の人たちの給与は40〜50年前に比べて減ったように思う。かつては、普通のお父さんだけが定年まで働けば、普通の家が持てたと思う。今は、普通のお父さんが定年まで働いても普通に家が持てるとは限らない。好むと好まざるとも夫婦で働かなくてはならなくなった。日本でも普通の暮らしの所得は減った。◆夫婦と子供たちも共に元気な家族にとっても、余裕のない暮らしである。そして、元気な普通の家族に他者を思いやる余裕はない。日本の投票結果は、その状況を示している。欧米の投票結果も同様である。他者の困難がいかに深刻であっても、自分の困難の解決が優先する。それは、蜘蛛の糸を這い上がるカンダタの姿である。◆自分以外に大きな困難を抱えている人々をイメージできない。自分の知らないことをイメージできることがインテリジェンスだと思うのだが。私たちは、無経験のことに想像力を働かせるのは不得意だ。死の経験はないが私たちは必ず死ぬ。自分の死についてイメージをしない人が多くなった。死は、そ

の時に考えようと言う。それは他者の死に無関心であることを示している。それが身近な人の死であっても。◆大切な人の死は、私の人生を目覚めさせる機会になってほしい。

川崎二三彦

朗報

対人援助学マガジン連載中の、おそらく約1名を除く全員に朗報です。



皆さんは、編集長から定期的に送られてくる「締切のお知らせメール」に恐怖感を覚えたことはないでしょうか。かく言う私も、メールの件名を見た途端に顔を背け、未読のまま放置し、このまま時間が止まればどんなに幸せだろうかと呟き、次の瞬間、どこから絞り出されたのかと疑いたくなるようなうめき声に、自分で驚いている有様なのです。

そんな私の味方が無数に存在することがわかりました！

まあ、騙されたと思って読んでみて下さい「めく切本」。いずれも名だたる多数の文筆家が、そろいも揃ってめく切地獄に追われる姿に、我が身を忘れて笑わずにはおれません。溜飲が下がります、現実に引き戻されるまでは。

*



というのはさておき、前号で紹介した動画版の「ジェノグラム―描き方と活用のコツ」。子どもの虹情報研修センター援助機関向けページにアップした後、多くの方に訪問していただき、おそらくはこのマガジ

ンを見られて、「是非みたいなので、援助機関向けページのパスワードを教えてください」と連絡してこられた方もおいででした。

試作品レベルのものではありますが、実際に参考にしている人も多くて聞きますので、改善点を検討し、さらによいものを目指して改定版を作りたいと考えています。引き続き皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしています。

*

などと言っている間に、実は私、町内会の老人会参加資格ができてしまいました。

この間、東京に行くのに新幹線の切符を新横浜までしか買ってなくて追加料金を払ったり、ホテルの部屋番号を勘違いして別の部屋の鍵を開けようとしているのに気づいて後ずさりしたり、研修講師で訪問した先で出されたお菓子を遠慮深く食べずにいたら、ひとまとめにしてお土産にしてくださいだったので有り難く頂戴したものの、ホテルに置き忘れて着払いで送ってもらったり、某学会に出かけるべく電車に乗る直前に参加証を忘れていないことに気づいて慌てて取りに戻ったり、确实、着実に呆け状態が進化、深化しております。

そんな私に朗報！ がありました。某鉄道会社が、〇〇歳以上の高齢者を対象にした「ジパング倶楽部」なるものを盛んに宣伝しているのを見つけたのです。ふと考えると、私もほやほやの有資格者。

詐欺に遭う老人が増加している昨今、怪しげなものではないかと眉に唾して調べてみると、何と年間 20 回も、(新幹線のぞみ・みずほを除いて)全国全線の JR が、特急券、乗車券を含めて3割引きなるというではありませんか。これを逃す手はないと即断即決、夫婦会員も可能というので、連れ合いも無理矢理説得して無事入会。



早速その権利を行使して、1年のうち9日間しか一般公開しないという佐賀県神埼市の「九年庵」を訪ねてみました。

というのはよいとして、宿泊した武雄温泉での出来事。幸せ気分で温泉に浸かり、やおら上がろうとしたその途端、丸裸のまま足を滑らせて転倒し、右腕打撲の不名誉の傷。

「ジパング倶楽部」より「老人クラブ」ですかね、やはり。

(2016/11/26 記)

荒木晃子

今回の原稿は、出張先の島根県松江市のホテルで完成した。本マガジンの連載開始以来、初の経験である。自分が(以外に?)不器用な人間なのは、ずっと以前から自覚がある。二つの作業を同時に進めるといった効率的な動きが苦手なのだ。しかし今回は、カウンセラー業務中に、執筆活動を行う、といった偉業を成し遂げたことになる。そういえば、最近とみに、順序良く仕事や作業の予定を組むことが不可能になった。気が付けば、現在係わっているプロジェクトは3チーム。業務以外にである。当然、プライベートな時間を楽しむ暇はない。この状況を嘆くも、喜ぶも自分次第。泣きべそをかきながら、ひたすらPCに向かい、やるべき作業を進める日々を送っている。

11月第1週には、第61回日本生殖医学会(横浜)で生殖医療従事者を対象に講演。先週は、昨年に続き、津田塾大学で講師も務めた。100名を超える女子大生たちの幸せを願い、思いの限りを語ることでできたと思う。今回の出張を終え自宅に戻れば、おそらく受講した学生たちから講義後の感想文が届いているはずだ。講義前に事前質問票として届いた100項目近くの問題の、その後がどう変化しているのか楽しみである。忙しい中にもよろこびがあり、また新たな出会いもある。なんと幸せな人生だこと!

鶴谷主一



幼稚園の年長組で、「エルマーのぼうけん」という童話を読んでいる。

僕が子どもの頃からある名作で、誰もが夢中になる!...と思っていた。しかし聞いていられない、興味が沸かない子どもがクラスに数人いるという報告を担当から受けた。

登場人物を自分の頭の中で動かさなくなってしまったのか! ショックだった。

担任はいろいろと働きかけているが、小さい挿絵では興味が沸かないらしい。乳児時代からテレビを含めて動画ばかりを見てきた子どもたちの脳でどんな現象が起きているのだろうか。気になる。

原町幼稚園

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

木村晃子

この10月、父が亡くなって1年が過ぎた。部屋にある父の写真は、いつも私を見ている。いなくなって改めて父の存在の大きさを感じている。父を亡くしてからの母は、心配なく元気に過ごしてくれている。父亡きあと、ふさぎこんでいる母をみたことがない。いつも、近くに友達がいる、それなりの交流のためのスケジュールもあって...母は母なりに楽しく生活が続いていることが私の安心でもある。そして、やがて老いる私自身も、どんな老いを生きていったら楽しいだろう? と考えることが

出てきた。「老いの事前相談」は、人生の諸先輩たちの生きる姿から感じ取るものだろうか？

乾明紀

過去3回の短信に肌の痒みが治らないということを書きましたが、6月に生まれた次男も肌荒れが酷く親子で苦勞していました。皮膚科で言われたことはとにかく肌を守ることであったので、私は掻かないように努め、子どもにはミトンをし、加えてお風呂上りにワセリンをたっぷり塗ることを心がけました。ワセリンって効果があるんですね。ようやく改善を感じられるようになりました。

ただ、また奥歯が少し痛むようになってきました。仕事中や就寝中に食いしばっているようです。慌ててマウスピースを復活したのですが、体ってメンテナンスを欠かしたらダメですね。

馬渡徳子

月日が経つのは、本当に早いもので、12月に父の一周忌を迎えます。母のたつての希望で、父の勤務先であった本社近くの菩提寺に、家族で訪れることになりました。

後輩社員の方々のご高配で、お目にかかれる機会をもてることにもなり、私たち家族の知らない職業人としての父の業績を、家族みんなで振り返る事が出来る、素敵な一周忌になりそうです。

家族にとっても、この日を区切り、「今から、ここから」と次の一步を踏み出せそうです。

皆様にも、神の御加護の元に、素敵なクリスマスと、良いお年をお迎えになられますように。 合掌

三嶋 あゆみ

相模原事件のことを忘れたくなくて、学ぶ機会を見つけたら手を伸ばしています。私の見ている世界は私しか知らないのに、外の基準で勝手に判断されるくやしさがまんを想像します。

この「徘徊介助犬」は、こんな相棒がいたらいいなと思って描きました。不安な時、うれしい時、さみしい時もソワソワする時

も、一緒にウロウロしてくれる頼れる相棒です。2014年作。

ブログ：<http://fooshi.exblog.jp/>

見野 大介 みのだいすけ

怒涛の秋のイベントラッシュもなんとか乗り切り、あとは餅つきをして新年を迎えることになります。

今年は兎にも角にも忙しかったです。そのおかげで来年は関西を筆頭に、東京や徳島、愛媛にも出展することが決まりました。自分の作品をより多くの人に観て頂ける機会が増えて、嬉しい限りです。

来年も、器の一つ一つを丁寧に作り、陶芸の楽しさを伝え、自分も陶芸を楽しみたいと思います。

団士郎

我が事ながら、七十前とは思えない秋のスケジュールをほぼ乗り切った。9月第一週末から、例年の青森県むつ市に出かけた。それを皮切りに延々と巡業になった。翌週末、山形WSに行った。その翌週には長崎ハウステンボスで家族療法学会とマンガ展、WSをした。翌週、神奈川県横須賀市での対人援助学会でシンポジストを務めた。月末、東京日帰りで学会の常任理事会に出席。10月第一週は入試面接があったので京都にいた。第二週の震災プロジェクト・宮城県多賀城市では、新しくなったTSUTAYA図書館のギャラリーでマンガ展&漫画トークを開催した。次の週末、家族心理学会で千葉県松戸の聖徳大学に行った。翌週末は帯広。新千歳でピックアップして貰って雪景色も見える道を車で2時間。遠い。夕刻について懇親会。翌日一日WSの後、車で三時間、夜札幌に到着。翌日一日WSを実施。

月末の土日に一息つけたのは、京都国際社会福祉センターのプログラムが参加少数で不開催になったからだ。それならと、妻と富士山麓、忍野八海近くの富士山が部屋の露天風呂から見えるところに出かけたら、大量天だった。11月第一週末は岩手県宮古市で、東日本大震災復興家族応援プロジェクト6年目。

二週目は定例の東京での家族理解WS第51回目。今回の会場は代官山。



翌日は埼玉県北浦和で一日WS。国際女子マラソンのコースに阻まれ、大きく迂回して会場に。

そして授業を済ませた火曜の夜、熊本へ。児童施設の心理士のための一日WS。震災後の益城町にも立ち寄る。

週末は17年目になる青森・弘前WS二日間プログラム。最終の日曜日は川崎医療福祉大学を会場に継続開催している岡山WS。12月の第一週末は福島市で震災プロジェクト。第二週は広島で一日WS。第三週は松江市で一日WS。そしてクリスマスイヴを迎えると、私の今年のスケジュールが終わる。

この間、毎週、月、火は大学院と学部で授業とゼミをしている。木曜日には京都市職員相談室のカウンセラー勤務。月例の事例検討会が立命館大学、大津、草津の勉強会。更に毎月の連載漫画「木陰の物語」制作と、現在作業中のこの季刊「対人援助学マガジン」編集。

これらをつつがなくやり通すには、健康が必須条件。だから今はストレッチに通っている。思わず「疲れた…」とこぼしたら、妻から「当たり前！少し仕事を減らさない！」と言われた。

もう新たな仕事を引き受けるような愚はしないからな！と新年に向けた決意。

千葉晃央

表彰や賞状の類とは無縁の人生を歩いてきた。勉強も、運動も、飛び抜けることなく過ごしてきた。それが20年、民間社会福祉施設で勤務したことで「感謝状」を頂いた。何か資格を習得したのでもなく、何か1番になったのではない。毎日、出勤し、利用者さんと共に過ごし、任された業

務を継続した時間への感謝状ならばうれしい。ギリギリに出勤していたことも、朝の7時には現場に毎日いたことも、深夜近くまでいたこともある。夜ご飯はみんなで弁当、差し入れはドーナツ、旅行の出し物で職員の漫才を必死に練習…など思い出は尽きない。お世話になった方々の一人一人の顔が浮かぶし、謝りたい気持ちでいっぱいになることもある。歳を重ね、やっと少しわかったこともあるし、今ならああいうことはしないので思い出したくないできごとたくさんある。「利用者さんのことを一番に考えるなら辞めないこと！」団先生に千葉が20代の頃に言われた言葉。私の思い出は一人のものではない。思い出の中にいる利用者さんのものでもある。そ

の共通体験をベースに今も会ってくださっている利用者さんもおられるし、一緒に過去を振り返ることができるたくく(棚0 鶯陵・w) マ者さんもいてくださる。そういう人がいることは人生そのものを広げる。これは、今回書いた編集後記にもつながる話。感謝に値する仕事が完璧にできているとは思わない。これからも日々精進あるのみ。

大谷多加志

いささか気力が乏しくなっているように自覚しているこの頃。流れを変えたいとは思っているのだけれど、具体的な動きにまではなかなか持っていけない。そんなグズグズしている自分を認識している。そんな言い訳をしておいて、今号の締切が迫る中、まだ

原稿を書きあげられないまま、ひとまず短信から書いている。夕刻から息子が発熱し始めて、先ほど熱を測ったら39度超え。ただの風邪と思っていたけれど、ひよっとするとインフルエンザかも、と思い至る。そういえば、もうそんな季節。もしインフルエンザとすると、私は今日1日の濃厚接触者。実は私はインフルエンザにかかる頻度が高く、仕事を始めてからは3年に1度、ここ数年では2年に1度はかかっている(予防接種をしても関係なく)。はたしてインフルエンザか否か。結果はたぶん、無事連載が成されているかどうかでわかります。